

6 「桜田門外ノ変」

吉村昭の「桜田門外ノ変」を読み終えた。文庫本で上下2巻。

江戸城桜田門外で井伊直弼が暗殺された事変である。物語は実行部隊の責任者であり指揮者、水戸藩郷士「関鉄之介」を主人公に語られている。

井伊大老は米国の圧力に屈し、朝廷の許可を得ずに日米通商条約を締結。このことが、水戸藩尊皇攘夷派に火をつける。水戸藩主一橋斉昭は、以前から尊皇攘夷強硬派として幕府と対立していた。井伊大老は自分の政策に異を唱える者をことごとく捕え処罰、安政の大獄である。吉田松陰も外国事情を知りたい一心で、米国船に忍び込もうとした罪で捕えられ獄死させられてしまう。なぜ、松陰のようなかけがえのない人を死に至らしめてしまうのか？

水戸藩脱藩士17名(加えて薩摩藩士1名)は井伊大老暗殺を企み、安政7年(1860年)3月3日ついに決行の日を迎える。屈強な武士に警護され、籠で彦根藩邸を出発した井伊だったが、あえなく暗殺されてしまう。井伊の首級を挙げたのは、薩摩藩士の有村次佐衛門である。当日は雪ということもあり、それが大きな味方となった。降り積もった雪は血に染まり、鏑迫り合いで切り落とされた指や耳が散乱していたという。その凄惨な姿が浮かぶようだ。

この暗殺に呼応して、薩摩藩が京に出兵し朝廷を守護する約束になっていたが、島津斉彬急死後に実権を握った弟の島津久光は出兵を許さず、結局計画は頓挫してしまう。

井伊大老襲撃の首謀者で指導者の高橋多一郎父子は補吏に囲まれ自刃、金子孫二郎は打首。襲撃を実行した18人の同士中、有村は割腹して果て、稲田重蔵は討死し、大関和七郎以下6名は死罪、山口辰之介らは自刃または傷がもとで死亡し遺体は斬首された。

関鉄之介は身を潜め逃亡生活を送るが、襲撃から約1年8ヵ月後の文久元年(1861年)10月19日、ついに逃亡先越後湯沢の田屋という宿で捕縛、江戸に送られ斬首された。

薩摩藩の蜂起は叶わなかったが、同士らは計画を実行に移した時点ですでに死を覚悟しているのであり、本懐を遂げた後は使命を全うしたことに満足していたことだろう。

生存していた3名のうち、最終的に2名は関と同様の運命をたどる。ただ一人「海後磋磯之介」は巧みに山中に潜み、さらに越後に数年間を過ごした後、幕末の動乱で追及が緩んだ後故郷に戻る。明治維新後東京に出て警視庁に入り、明治8年水戸に戻って結城警察署に勤務した。退官後老後を郷里で過ごし明治36年5月19日76歳で病没した。

この桜田事変をきっかけに、尊王攘夷から尊王倒幕と、急激な世論の変化を引き起こし、薩長土肥を中心とした倒幕に繋がっていった。事変の後大政奉還までわずか8年であった。

今からたった150年前のことなので記録や遺品が多く残っている。鉄之介の孫、関勇氏の家に彼の日記。彼の潜伏先の一つである桜岡家には、襲撃直前に二百両の金をおさめて鉄之介に送り届けたという大きな真鍮製の薬缶が保管されていた。

小説は淡々と事実が記されているが、こういう遺品が残っていることを知ると、歴史の重みを実感させられ、そのときの情景が生き生きと蘇るようだ。わずか150年前のことなのに、人のあり方は今とずいぶん差があるように思う。(2010.12.06)